

# 博士論文（要約）

論文題目 共謀共同正犯に関する基礎的研究

氏 名 黄 士 軒

## 目次

第一章	問題の所在及び本稿の目的	9
第一節	共謀共同正犯に関する学説の現状からみた問題点	9
第一款	総説	9
第二款	単独犯との類似性から出発する共同正犯理論の問題点	10
第一項	共謀共同正犯否定説	10
第二項	実質的実行共同正犯説	12
第三項	主観説	13
第四項	行為支配説	15
第三款	個人の行為ないし役割の重要性を重視する見解の問題点	17
第四款	団体本位の共犯理論の問題点	19
第二節	判例理論に関する理解及び最近の共謀共同正犯実務の問題点	21
第一款	判例理論の形成経過に関する一般的な理解の問題点	21
第二款	判例による共謀共同正犯の肯定は立法者の意思に反するのか	24
第三款	判例の立場を犯罪の自己性の判断とする理解の再確認の必要性	25
第四款	最近注目される実務の動向について——いわゆるスワット事件決定	26
第三節	共謀共同正犯の比較研究の問題性	28
第四節	本稿の課題	29
第二章	日本における共謀共同正犯理論の形成及び展開	31
第一節	旧刑法時代における共謀共同正犯の形成	31
第一款	旧刑法の共犯規定及び学説	31
第一項	旧刑法の共犯規定の概観	31
第二項	共同正犯に関する学説の概況	32
第二款	大審院判例における共謀共同正犯理論の形成	33
第一項	共同正犯の客観面に関する判例の変化についての考察	34
一.	旧刑法時代初期の判例における形式的正・従犯区別基準の採用	34
二.	正犯性の実質的判断への判例の立場の変化	36
1.	実質的正犯性判断を可能にする解釈論の基礎	36
2.	「実質上一罪」における実質的正犯性判断	38
3.	犯行現場にいない共謀者の正犯性の実質的判断	41
4.	見張行為者の正犯性判断基準の変更	46
5.	幫助犯の成立時期に関する判例の立場の変更	48
三.	判例における「実行正犯」の概念	50
四.	小括	52
第二項	共同正犯の主観面に関する判例の立場	53

一. 犯罪意思の連合の要求.....	53
二. 共同正犯の意思の内容.....	55
第二節 現行刑法の制定と共謀共同正犯に関する立法者意思.....	57
第一款 現行刑法の成立過程における各草案の共同正犯規定の概観.....	57
第二款 立法過程における草案起草者意思の変遷.....	60
第一項 明治 28 年草案及び同 30 年草案の共同正犯規定の変化.....	60
第二項 明治 35 年草案の起草者意思.....	63
第三項 共謀共同正犯に関する現行刑法 60 条の解釈可能性.....	64
第三節 現行法時代の判例における共謀共同正犯理論.....	65
第一款 大審院時代の判例.....	65
第一項 客観面の考察.....	65
一. 形式的客観説の拒否.....	65
二. 実質的正犯性判断の連続性.....	68
1. 見張行為者の場合.....	68
2. 共謀に関与したに過ぎない者の場合.....	68
3. 現行法時代の大審院判例における「実行正犯」.....	70
第二項 主観面の考察.....	71
第三項 小括.....	74
第二款 最高裁判所時代の判例.....	74
第一項 練馬事件判決までの判例の状況.....	74
第二項 練馬事件判決の意義の再理解.....	75
第三項 練馬事件判決以降の判例の状況.....	78
一. 判例における正犯性の総合判断の発展.....	79
二. 最近の判例の問題点——いわゆるスワット事件決定を中心に.....	82
第四節 小括.....	86
第三章 ドイツにおける共同正犯に関する考察.....	88
第一節 近代ドイツ刑法における共同正犯の立法例の変遷.....	88
第一款 前史.....	88
第二款 共犯に関する 19 世紀前半のドイツの主要な立法形式.....	91
第一項 概観.....	91
第二項 1871 年バイエルン刑法典の惹起者及び共同惹起者に関する規定.....	93
一. 総則の規定.....	93
1. 惹起者に関する規定.....	93
2. 共謀に基づく犯罪の共同惹起者に関する規定.....	94
① 共謀 (Complot) に基づく共同惹起者に関する規定.....	94
② 犯罪集団 (Bande) に関する規定.....	95

二. 各則における犯罪集団による犯罪遂行の加重規定 .....	95
第三項 幫助者に関する規定 .....	96
第四項 惹起者＝幫助者形式の特徴 .....	96
第五項 小括.....	99
第三款 1851年プロイセン刑法典における共犯規定.....	99
第一項 概観.....	99
第二項 共犯に関する総則の規定.....	103
第三項 各則における集団窃盗・強盗に関する規定.....	103
第四項 1851年プロイセン刑法典の共犯体系の特徴.....	103
第五項 1851年プロイセン刑法典の下での「共同正犯」に関する学説の理解.....	105
第四款 1871年ドイツ帝国刑法典の共犯規定.....	105
第一項 総則の規定.....	105
第二項 各則における集団窃盗・強盗の規定.....	106
第三項 1871年ドイツ帝国刑法典の共犯規定の特徴.....	106
第四項 共同正犯規定の立法理由.....	107
第五項 小括.....	108
第五款 現行ドイツ刑法における共犯規定.....	109
第一項 総則の共犯規定.....	109
第二項 各則における犯罪集団による窃盗・強盗罪の規定.....	109
第六款 小括 .....	110
第二節 共同正犯に関する学説・判例 .....	111
第一款 学説 .....	111
第一項 戦前の主要な学説の概況.....	111
一. 主観説 .....	112
二. 形式的客観説.....	114
三. 小括 .....	115
第二項 今日の主要な学説の状況.....	115
一. 総説 .....	115
二. 共同正犯の個人的把握のアプローチを採用する見解 .....	116
1. 機能的行為支配説.....	116
① 主張 .....	116
② 共同正犯の成立範囲 .....	117
2. 相互教唆説.....	118
① 主張 .....	118
② 共同正犯の成立範囲 .....	118
3. 相互代表・委任説.....	119

① 主張 .....	119
② 共同正犯の成立範囲 .....	121
4. 正犯性の全体的考察説 .....	121
① 主張 .....	121
② 共同正犯の成立範囲 .....	122
三. 共同正犯を集合的に把握するアプローチを採用する見解 .....	122
1. 集合主体説 .....	122
① 主張 .....	123
② 共同正犯の成立範囲 .....	126
2. 全体行為説 .....	126
① 主張 .....	126
② 共同正犯の成立範囲 .....	127
四. 中間説 .....	128
1. 主張 .....	128
2. 共同正犯の成立範囲 .....	128
第三項 小括 .....	129
第二款 共同正犯に関するドイツの判例 .....	131
第一項 判例理論 .....	131
一. ライヒ裁判所時代の判例 .....	131
二. 連邦最高裁判所時代の判例 .....	134
1. 主観説の踏襲 .....	134
2. 主観的要素及び客観的要素の総合判断の理論 .....	134
① 「犯罪事実との緊密な関係」の概念による主観説の理解 .....	134
② 「犯罪事実との緊密な関係」の概念に基づく総合判断の発展 .....	137
三. 小括 .....	139
第二項 共同正犯の具体的な成立範囲についての考察 .....	139
一. 犯行時に犯行現場に居合わせる者の正犯性判断 .....	139
二. 犯罪遂行上重要な行為を行った者の正犯性判断 .....	142
1. 見張行為者 .....	142
2. 犯行後の逃走用の車の用意及び運転する者 .....	143
3. 謀殺への重要な関与を行った者 .....	145
三. 犯行時に犯行現場にいない者の共同正犯性判断 .....	146
四. 実行行為の一部に関与する者を幫助犯とする事例 .....	150
第三項 小括 .....	152
第三節 組織的権力機構に基づく間接正犯に関する学説・判例 .....	153
第一款 学説の状況 .....	153

第一項 総説.....	153
第二項 間接正犯説.....	155
一. 行為支配説に基づく主要な見解.....	155
1. ロクシンによる「組織的支配に基づく間接正犯」の理論.....	155
2. シューネマンによる「行為支配の段階付けの原理」.....	157
3. シュレッサーによる「社会的行為支配」に基づく間接正犯概念.....	159
二. シュレーダーの理論.....	160
第三項 共同正犯説.....	161
第四項 教唆犯説.....	162
第五項 小括.....	163
第二款 判例の状況.....	163
第一項 旧東ドイツ国家防衛評議会事件判決.....	164
第二項 旧東ドイツ国家防衛評議会事件判決以降の判例の発展.....	167
第三項 小括.....	170
第三款 検討.....	170
第四節 集団窃盗・強盗罪に関する学説・判例.....	172
第一款 従来判例・学説.....	172
第一項 学説.....	172
第二項 判例.....	173
一. 人数に関する下限の要求について.....	173
二. 集団構成員の時間的・場所的共同作用の要否.....	174
第二款 1970年以降の学説.....	175
第三款 2001年連合部決定及びその後の学説.....	177
第一項 新判例の出現.....	177
第二項 2001年連合部決定.....	177
第三項 2001年連合部決定以降の学説.....	180
第五節 まとめ——日本とドイツの共謀共同正犯の比較.....	181
第四章 結論.....	184
附表.....	187
参考文献.....	190
一. 日本語文献.....	190
二. ドイツ語文献.....	199

## 論文の要約

本稿の目的は、日本における共謀共同正犯理論の形成過程、及びドイツの共同正犯に関する立法、学説及び判例の全体像を把握し、共謀共同正犯理論の発展に寄与しようとするものである。

本稿第一章において、現在の日本における、共謀共同正犯に関する学説の問題点、判例理論の問題点、及び共同正犯に関するドイツとの比較研究の問題点を確認した。

すなわち、第一に、現在、共謀共同正犯に関する共犯理論として、個人的なアプローチからの学説（共謀共同正犯否定説、実質的実行共同正犯説、主観説、行為支配説）には、共同正犯の条文を必ずしも整合的に説明できていない問題点、及び共同正犯の法理を十分に説明できていない問題点があり、個人の役割の重要性を重視する学説には、条文との整合性の問題点、及び共同正犯の法理を必ずしも十分に説明できていない問題点があり、団体本位のアプローチを採用する共犯理論には、共同正犯の法理を説明できても、共同正犯の拡張を導きかねないという問題点がある。

第二に、共謀共同正犯の判例理論については、明治 29 年の大審院判例によって最初に知能犯に限って共謀共同正犯が認められ、その後次第に共謀共同正犯の成立範囲が拡大され、昭和 11 年の大審院判例によって共謀共同正犯がすべての犯罪に認められるようになって判例の立場が確立された、というのが一般的理解であるが、このような理解には、明治 29 年以前の判例の形成過程を十分に把握できていない問題がある。また、判例は現在の立法者の意思に反して共謀共同正犯を肯定したという批判がなされているが、このような批判は、立法過程に即して立法者意思を厳密に把握していない問題がある。さらに、現行法時代の判例は犯罪の自己性を基準として正犯性を判断する立場を採用しているという理解には、旧刑法時代からの判例の発展を十分に確認していない問題点がある。一方、現在の実務においては、いわゆるスワット事件決定には、支配型共謀共同正犯が拡大される危険性があるとされ、限定的解釈が必要である。

第三に、ドイツの共同正犯に関する現在の日本の研究状況からみると、ドイツの共同正犯の規定の背景、すなわち近代ドイツの刑事実定法の状況に即して共同正犯規定の形成を把握する必要がある。そして、ドイツの判例・学説における共同正犯ないし共謀共同正犯の成立範囲を正確に把握する必要もある。さらに、ドイツの組織的権力機構に基づく間接正犯は日本の支配型共謀共同正犯に相当する指摘もあるから、共同正犯の研究として、組織的権力機構に基づく間接正犯に関するドイツの判例・学説の状況をも把握する必要がある。

以上の確認の結果に基づき、本稿は、旧刑法時代から現在までの実務における共謀共同正犯理論の形成及び発展を詳しく考察することを第一の課題とする（第二章）。そして、日本の共謀共同正犯理論の発展のために、ドイツの共同正犯に関する立法・判例・学説の全

体像を把握することを、第二の課題とする（第三章）。

第二章においては、旧刑法時代から現在までの大審院及び最高裁判所判例を網羅的に検討分析すること、及び現行刑法の立法者の意思の再確認を中心に、考察を加えた。その結果は以下のようなものである。

第一に、旧刑法時代の判例は、犯罪を、主観面の共謀及び客観面の共謀に基づく実行によって構成するものとして把握した上で、旧刑法時代の通説が採用する正犯は犯罪の原因であるという考え方を実質的に解釈し、共謀共同正犯の肯定の可能性を開いた。旧刑法時代の判例は、客観面においても、主観面においても、（Ⅰ）全体的視点と（Ⅱ）個別的視点を運用し、共同正犯の実体を把握している。

第二に、現行刑法の立法過程において、明治 35 年刑法草案が貴族院で審議されたときの草案政府委員の発言は、確かに共謀共同正犯を否定する意思が示されているが、旧刑法の共同正犯規定の「現に」の文言、共謀共同正犯を視野に入れた審議の結果、明治 30 年草案において削除された経緯、及び同時代に大審院はすでに共謀共同正犯を肯定していた事実からみると、立法者には共同正犯の規定によって共謀共同正犯を把握する意思があったと理解することも自然である。

第三に、旧刑法時代の判例理論は、現行法時代の大審院に維持され、練馬事件判決によって改めて確認された。大審院時代の昭和 11 年連合部判決を共同意思主体説に依拠するものと理解し、練馬事件判決を間接正犯類似の観点または個人的観点を実務に「導入」したものと理解する従来の見解は、再検討の必要がある。上述の旧刑法時代の判例理論は、主観面と客観面を共に考慮し、全体的視点と個別的視点を併用する「規範的総合説」であり、「主観説」ではない。

第四に、スワット事件決定において、親分である被告人と部下との共通の経験に依拠して、黙示的な意思連絡による共謀が認められたが、組織的な犯罪の実態を必ずしも十分に把握できていない問題があり、且つ共謀共同正犯の拡大の危険性が存在している。したがって、限定的な解釈を可能性の探求が必要である。

第三章において、ドイツの立法・判例・学説を対象に、ドイツの共同正犯の全体像を把握するために考察を加えた。その成果は以下のようなものである。

第一に、立法上、近代ドイツにおいては、1813 年バイエルン刑法典をはじめ、共犯立法の主流的な体系は、惹起者 (Urheber) - 幫助者 (Gehilfe) の体系であり、この体系の下で、共謀に基づく犯罪遂行の場合、共謀者らが全員共同惹起者として処罰されていた。1851 年のプロイセン刑法典は、フランス刑法典の影響を受けて、正犯 (Täter) - 共犯 (Teilnehmer) の共犯体系を採用し、共犯を教唆犯と幫助犯とに分類したが、共同正犯の規定を設けなかった。1871 年のドイツ帝国刑法典は、プロイセン以外のドイツの立法例を参考して、共同正犯の規定を設けた。共同正犯の規定は、日本の刑法に継受され、共犯に関する日本の解

積理論の出発点となった。

第二に、共同正犯に関するドイツの学説は、集合的アプローチ（イエールデン、レッシュの集合主体説、デンカーの全体行為説、フリスターの中間説）を採用する見解のみではなく、個人的アプローチ（行為支配説の通説、キントホイザーの相互代表説、ホイヤーの相互教唆説、シュミットホイザーの正犯性の全体的考察説）を採用する見解の多数も、共謀共同正犯を肯定している。一方、ドイツの実務上、ライヒ裁判所の判例に存在していた主観面・客観面を総合する判断の基礎が現在の連邦最高裁判所に承継され、今日に至っている。その正犯性判断は、主観面及び客観面の事実要素を総合して判断する「規範的混合理論」である。このような理論の下、共謀共同正犯が認められている。注目すべきは、その具体的適用として、連邦最高裁判所は正犯性認定上のマイナスの要素を重視し、比較的広く幫助犯の成立を認めていることである。

第三に、ドイツの組織的権力機構に基づく間接正犯の場合において、判例と通説は、構造上の理由に依拠し、背後者を間接正犯としている。その理論的な根拠としては、主に(1)実行者の代替可能性を重視する見解（ロクシン説）、(2)事象の優越的支配の総合判断（シュエネマン説）、(3)社会関係に基づく実行者の決定自由の制限（シュレッサー説）、(4)決意した行為者の利用（シュレーダー説）、(5)構成要件実現を導く枠組み的条件の創出及びその枠組み的条件の利用（判例理論）などがあるが、必ずしも説得的ではなく、共同正犯説も有力である。

第四に、ドイツ刑法の集団窃盗・強盗の規定の解釈として、2001年の大法廷決定以前は、集団は2人以上によって構成され、そして集団構成員が集団窃盗・強盗の共同正犯になるためには、加功行為の現場性が必要であるという見解が、通説であった。1970年代以降、学説で集団構成の人数の下限を3人にする見解が見られるようになり、連邦最高裁判所は、2001年の大法廷決定によって、集団構成の人数の下限を3人にし、加功の現場性の要件を放棄した。その結果、集団窃盗・強盗の罪は、組織的犯罪の色彩を有するものになった。日本の特別刑法には、集団的犯罪の規定もあるので、このような集団犯罪に関するドイツの判例・実務を引き続き注目することは、日本の刑事法学にとっても有益である。

第四章において、以下のように本稿の考察の成果を挙げた。

第一に、ドイツと日本の判例実務が、実務上多種多様な共同正犯の態様を的確に把握するために、百年以上採用してきた規範的総合説の、複数の視点を運用する考察方法は、共謀共同正犯の把握にとって妥当なアプローチであると思われる。

第二に、刑法60条の解釈として、旧刑法時代以来の日本の判例理論は、全体的視点を運用して、刑法60条の「犯罪」の概念を、共謀と共謀に基づく実行の両部分を有する「共同の」ものとして拡張し、そのような「犯罪」のいずれかの部分を形成する者を、「実行」者すなわち正犯とするものである。このような全体的視点と個別的視点の運用は、刑法60条の解釈の参考にもなる。

第三に、現在の垂直型共謀共同正犯の成立を限定的に解釈する契機は、ドイツの判例・学説が示唆している、組織の強固さにある。実務上、下位の実行者との距離の遠い上位者の正犯性を根拠づけるためには、客観的な強固の組織の要素を重視する必要がある。そうでなければ、垂直型の共同正犯の拡張を導く危険がある。

## 参考文献

### 一. 日本語文献

- 相内信 「故意ある幫助的道具の問題」金沢法学 23 卷 1・2 号 (1981 年)
- 浅田和茂 「共謀共同正犯」中山研一＝浅田和茂＝松宮孝明共著『レヴィジョン刑法 1』(1997 年)
- 「共犯論覚書」『中山研一古稀祝賀論文集第三卷』(1997 年)
- 「共謀共同正犯の拡散」『小田中聰樹先生古稀記念論文集下巻』(2005 年)
- 『刑法総論補正版』(2007 年)
- 「共謀共同正犯 (1)」『刑法判例百選 I 総論 (第六版)』(2008 年) 153 頁
- 朝山芳史 「共謀の認定と判例理論」木谷明編『刑事事実認定の基本問題』(2010 年)
- 足立昌勝 「プロイセン一般ラント法第二部第二〇章 (刑法) 試訳 (一)」法経論集 (静岡大学法経短期大学部) 51 号 (1983 年)
- 「近代初期刑法の基本構造」法経論集 (静岡大学法経短期大学部) 69・70 号 (1993 年)
- 「プロイセン一般ラント法第二編第二〇章 (刑法) (一)」関東学院法学 2 卷 1・2 号 (1993 年)
- 「プロイセン一般ラント法第二編第二〇章 (刑法) (二)」関東学院法学 3 卷 1 号 (1993 年)
- 足立昌勝監修・岡本洋一＝齋藤由紀＝永嶋久義共訳  
「プロイセン一般ラント法第 2 編第 20 章 (刑法) 試訳 (3)」関東学院法学 23 卷 1 号 (2013 年)
- 阿部純二 『刑法総論』(1997 年)
- 「過失の共同正犯——スイスの一判決を機縁として」『莊子邦雄先生古稀祝賀論文集』(1991 年)
- 阿部力也 「共同正犯の構造」明治大学大学院紀要 31 集 (1994 年)
- 「共同正犯の主観的成立要件について」法律論叢 (明治大学) 70 卷 1 号 (1997 年)
- 「黙示の意思連絡について」法律論叢 (明治大学) 70 卷 2・3 号 (1997 年)
- 「予備段階の共働について」法律論叢 (明治大学) 70 卷 5・6 号 (1998 年)
- 「共同正犯の未遂と共同正犯の構造」明治大学社会科学研究所紀要 39 卷 2 号 (2001 年)
- 「共同正犯論における行為帰属説の展開」明治大学法科大学院論集 5 号 (2008 年)
- 「共同正犯における客観的寄与の意義について」明治大学法科大学院論集 7 号 (2010 年)
- 「共同正犯における各関与者の相互利用補充関係について」明治大学法科大学院論集 9 号 (2011 年)

- 甘利航司 「過失犯の共同正犯についての一考察」 一橋論叢 134 卷 1 号 (2005 年)
- 東たいち編 『明治期大審院判検事略歴』 (1988 年)
- 飯田宏作 『刑法総論』 (1892 年)
- 石井一正=片岡博  
「共謀共同正犯」 小林充=香城敏磨編 『刑事事実認定 (上)』 (1992 年)
- 石渡敏一 『刑法総論』 (1901 年)
- 磯部四郎 『刑法講義上巻』 (1893 年)
- 井田良 『講義刑法学・総論』 (2009 年)
- 井田良=岡上雅美訳  
『ドイツ刑法典』 (2007 年)
- 出田孝一 「共謀共同正犯の意義と認定」 『小林充先生佐藤文哉先生古稀祝賀刑事裁判論集』  
(2006 年)
- 井上正一 『日本刑法講義』 (1891 年)
- 井上操 『刑法述義第壹編 (下)』 (1883 年)  
『刑法述義第四編』 (1890 年)
- 今井猛嘉=小林憲太郎=島田聡一郎=橋爪隆共著
- 今井康介 「共同正犯の客観的帰責構造」 上智法学論集 55 卷 3・4 号 (2012 年)  
「過失犯の共同正犯について (1)」 早稲田大学大学院法研論集 143 号 (2012 年)  
「過失犯の共同正犯について (1)」 早稲田大学大学院法研論集 144 号 (2012 年)  
『刑法総論』 (2009 年)
- 岩田誠 「最高裁判所判例解説 (昭和三三年三月一七月分) 97」 法曹時報 10 卷 9 号 (1958  
年)
- 植松正 『刑法学総論』 (1955 年)  
「共謀共同正犯」 日本刑法学会編 『刑法講座第 4 巻』 (1963 年)
- 内田文昭=山火正則=吉井蒼生夫編著  
『刑法(1)－I (明治 40 年)』 (日本立法資料全集 20) (1999 年)  
『刑法(1)－II (明治 40 年)』 (日本立法資料全集 20-2) (2009 年)  
『刑法(1)－III (明治 40 年)』 (日本立法資料全集 20-3) (2009 年)  
『刑法(2) (明治 40 年)』 (日本立法資料全集 21) (1993 年)  
『刑法(3)－I (明治 40 年)』 (日本立法資料全集 22) (1994 年)  
『刑法(3)－II (明治 40 年)』 (日本立法資料全集 23) (1994 年)  
『刑法(5) (明治 40 年)』 (日本立法資料全集 25) (1995 年)  
『刑法(6) (明治 40 年)』 (日本立法資料全集 26) (1995 年)  
『刑法(7) (明治 40 年)』 (日本立法資料全集 27) (1996 年)
- 内田文昭 「部分的共同正犯について (一)」 警察研究 62 卷 7 号 (1991 年)  
「部分的共同正犯について (二・完)」 警察研究 62 卷 8 号 (1991 年)

- 内海朋子 『過失共同正犯について』(2013年)
- 白木豊 「正犯概念と共謀共同正犯(一)」上智法学論集32巻1号(1989年)  
「正犯概念と共謀共同正犯(二・完)」上智法学論集34巻1号(1991年)
- 江木衷 『現行刑法汎論』(1888年)
- 江口三角 「フランス刑法における共犯(一)」愛媛大学紀要第四部社会科学3巻4号(第一分冊)(1961年)
- 大久保隆志 「共謀共同正犯に関する一考察(一)」大阪市立大学法学雑誌28巻1号(1981年)  
「共謀共同正犯に関する一考察(二・完)」大阪市立大学法学雑誌28巻2号(1982年)
- 大越義久 『共犯の処罰根拠』(1981年)  
『共犯論再考』(1989年)  
『刑法解釈の展開』(1992年)  
「共犯から見た判例と学説」刑法雑誌39巻2号(1999年)  
「過失犯の共同正犯」『内田文昭先生古稀祝賀論文集』(2002年)  
『刑法総論(第5版)』(2012年)
- 大塚仁=河上和雄=佐藤文哉=古田佑紀編  
『大コンメンタール刑法(第二版)第5巻』(1999年)
- 大塚仁 『間接正犯の研究』(1958年)  
『刑法概説(総論)』(2008年)
- 大場茂馬 『刑法総論下巻』(1918年)
- 大谷實 『刑法講義総論』(2012年)
- 岡田朝太郎 『日本刑法論』(1894年)
- 岡田庄作 『刑法原論総論』(1929年)
- 小野清一郎 『刑罰の本質について・その他』(1955年)  
『新訂刑法講義総論』(1956年)  
『犯罪構成要件の理論』(1961年)
- 小野上真也 「(外国文献紹介)ベルント・シューネマン 「『正犯の背後の正犯』という法形象と行為支配の段階付けの原理」」早稲田法学82巻4号(2007年)
- 岡野光雄 「共同意思主体説と共謀共同正犯論」刑法雑誌31巻3号(1991年)  
「個人的共犯論と「共謀」共同正犯論」『西原春夫先生古稀祝賀論文集第二巻』(1998年)  
『刑法要説総論(第2版)』(2009年)
- 勝本勘三郎 『刑法要論總則』(1913年)
- 金子博 「過失犯の共同正犯について——「共同性」の規定を中心に」立命館法学326号(2010年)  
「不作為犯の共同正犯(1)」立命館法学344号(2012年)

- 「不作為犯の共同正犯 (2)」立命館法学 347 号 (2013 年)
- 亀井源太郎 「実行行為を行う従犯」東京都立大学法学会雑誌 40 卷 1 号 (1999 年)  
「共謀共同正犯における黙示の意思連絡とその認定」法学教室 280 号 (2004 年)  
「共謀共同正犯における黙示の意思連絡とその認定」判例時報 1882 号 (2005 年)  
『正犯と共犯を区別するということ』(2005 年)
- 亀山貞義 『刑法講義卷之一』(1898 年)
- 川口浩一 「組織支配による間接正犯の理論の企業・環境犯罪への適用可能性」姫路法学 27・28 号 (1999 年)
- 川端博 「共謀共同正犯の意義」『刑法判例百選 I 総論 (第五版)』(2003 年)  
「共謀共同正犯の基礎付けと成立要件」『現代社会型犯罪の諸問題 (板倉宏博士古稀祝賀論文集)』(2004 年)  
『刑法総論講義』(2013 年)
- 川端博＝西田典之＝原田國男＝三浦守編  
『裁判例コンメンタール刑法第 1 卷』(2006 年)
- 菊池則明 「共謀 (2) 一対等型共謀」『刑事事実認定重要判決 50 選』(小林充＝植村立郎編) (2010 年)
- 北川陽祐 「過失の共同正犯について」龍谷大学大学院法学研究 13 号 (2011 年)
- 木村亀二 「刑法的思惟の危機」法曹時報 2 卷 3 号 (1950 年)  
「共謀による共同正犯—最高裁判所判例に因んで」警察研究 21 卷 1 号 (1949 年)  
『刑法総論』(1959 年)
- 草野豹一郎 「教唆の未遂と共謀に因る共同正犯」法曹時報 2 卷 1 号 (1950 年)  
『刑法要論』(1956 年)  
「共犯の従属性」『刑法改正上の重要問題』(1975 年) (初出。法学協会雑誌 50 卷 6 号 1932 年)  
「共犯の独立性」『刑法改正上の重要問題』(1975 年) (初出。法学協会雑誌 55 卷 4、6 号 1937 年)
- 倉富勇三郎 『刑法講義』(1892 年)
- 倉富勇三郎＝平沼騏一郎＝花井卓蔵監修・高橋治俊＝小谷二郎共編・松尾浩也増補解題『増補刑法沿革綜覧』(1990 年)
- 小疇傳 『日本刑法論總則之部』(1906 年)
- 小泉英一 「実行行為に加功せざる共同正犯」法学志林 38 卷 11 号 (1936 年)
- 小暮得雄 「共謀共同正犯の意義」『刑法判例百選 I 総論 (第三版)』(1991 年)
- 江家義男 『刑法講義總則篇』(1940 年)
- 後藤啓介 「日本刑法における共謀共同正犯と国際刑法における「正犯」概念に関する一考察」法学政治学論究 (慶応大学) 87 号 (2010 年)  
「間接正犯論の新展開」慶應法学 24 号 (2012 年)

- 古賀廉造 『刑法總論』(1899年)
- 小林充 「共同正犯と狹義の共犯の區別—実務的観点から—」法曹時報 51 卷 8 号(1999年)
- 齊藤彰子 「不作為の共同正犯(1)」法学論叢(京都大学) 147 卷 6 号(2000年)  
「不作為の共同正犯(2完)」法学論叢(京都大学) 149 卷 5 号(2001年)
- 齊藤金作 「共謀共同正犯の論争」早稲田法学 26 卷 1 冊(1950年)  
『共犯理論の研究』(1954年)  
『刑法總論』(1955年)  
「共謀共同正犯」佐伯千仞=団藤重光編『総合判例研究叢書第5』(1956年)  
「共謀共同正犯の理論」日本刑法学会編『刑事法講座 第3卷 刑法(Ⅲ)』(1957年)  
『共犯判例と共犯立法』(1959年)
- 齊藤金作訳 『一九五六年ドイツ刑法總則草案理由書(上)』(1959年)
- 齊藤金作ほか訳 『一九六二年ドイツ刑法草案理由書(總則篇)——第一分冊——』(1966年)
- 齊藤誠二 「いわゆる「正犯の背後の正犯」をめぐって」警察研究 55 卷 10 号(1984年)  
「共同正犯の性格をめぐる管見——いわゆる機能的な行為支配説からのアプローチ——」『神山敏雄先生古稀祝賀論文集』(2006年)
- 佐伯千仞 『刑法講義(總論)』(1968年)  
『共犯理論の源流』(1987年)  
「共謀共同正犯」『竹田=植田博士還暦祝賀論文集』(1967年)
- 佐伯仁志 「共犯論(2)」法学教室 306 号(2006年)  
『刑法總論の考え方・楽しみ方』(2013年)
- 坂本英雄 『刑法基本論總論』(1938年)
- 佐久間修 「共同正犯における集団犯罪の法理——共謀共同正犯と「正犯の背後の正犯」を中心として——」『齊藤誠二先生古稀記念論文集』(2003年)
- 桜木澄和 「共謀・共同正犯の法理」法律時報 36 卷 1 号(1964年)
- 司法研修所編 『難解な法律概念と裁判員裁判』(2009年)
- 島田聡一郎 『正犯・共犯論の基礎理論』(2002年)  
「実行行為という概念について」刑法雑誌 45 卷 1 号(2005年)  
「暴力団組長である被告人が、自己のボディガードらのけん銃等の所持につき直接指示を下さなくても共謀共同正犯の罪責を負うとされた事例」ジュリスト 1288 号(2005年)  
「間接正犯と共同正犯」『神山敏雄先生古稀祝賀論文集第一卷』(2006年)  
「共謀共同正犯論の現状と課題」川端ほか編『理論刑法学の探究③』(2010年)
- 島田武夫 『日本刑法新論總論』(1938年)
- 嶋矢貴之 「過失犯の共同正犯論(1)」法学協会雑誌 121 卷 1 号(2004年)  
「過失犯の共同正犯論(2)・完」法学協会雑誌 121 卷 10 号(2004年)

- 下村康正 「共同正犯」日本刑法学会編『刑法講座第4巻』(1963年)  
『共謀共同正犯と共犯理論』(1975年)
- 末道康之 「暴力団組長である被告人が自己のボディガードらのけん銃等の所持につき直接指示を下さなくても共謀共同正犯の罪責を負うとされた事例」『法学教室判例セレクト2003』(2004年)
- 鈴木彰雄 「謀殺の共同正犯」比較法雑誌26巻1号(1992年)  
「組織的権力機構による間接正犯」関東学園大学法学紀要10号(1995年)  
「ドイツ刑法における「組織的権力機構による間接正犯」の理論」関東学園大学法学紀要23号(2001年)
- 芦澤政治 「(11)暴力団組長である被告人が自己のボディガードらのけん銃等の所持につき直接指示を下さなくても共謀共同正犯の罪責を負うとされた事例」『最高裁判所判例解説刑事篇(平成15年度)』(2006年)
- 曾根威彦 『刑法の重要問題(総論)』(2005年)  
『刑法総論第4版』(2008年)
- 高木豊三 『刑法義解』(1881年)  
『刑法講義録』(1886年)
- 高橋則夫 「共同正犯の帰属原理」『西原春夫先生古稀祝賀論文集第二巻』(1998年)
- 田川靖紘 「ドイツにおける正犯概念の一断面」早稲田大学大学院法研論集136号(2010年)  
「教唆犯と間接正犯について」早稲田大学大学院法研論集137号(2011年)
- 瀧川幸辰 『刑法講義』(1930年)  
「共謀共同正犯」『刑法の諸問題』(1951年)
- 滝沢正 『比較法』(2009年)
- 龍岡資久 「共謀共同正犯に関する諸問題」『斉藤金作博士還暦祝賀論文集』(1964年)
- 鶴見守義 『刑法総論』(1901年)
- 照沼亮介 『体系的共犯論と刑事不法論』(2005年)
- 団藤重光 『刑法綱要総論(増補)』(1962年)  
『刑法綱要総論(第三版)』(2000年第3版第7刷)
- 団藤重光編 『注釈刑法(2) - II 総則(3)』(1969年)
- 富井政章 『刑法論綱』(1889年)
- 中野次雄 「共謀共同正犯にあたりとされた事例(特に団藤裁判官の意見)」警察研究56巻1号(1985年)
- 中村義孝編 『ナポレオン刑事法典史料集成』(2006年)
- 中森喜彦 「実行行為を行う従犯」判例タイムズ560号(1985年)
- 中山研一 「共謀共同正犯」中山=西原=藤木=宮澤共編『現代刑法講座(第3巻)』(1979年)  
『刑法総論』(1982年)

- 中義勝 『刑法総論』(1971年)
- 内藤謙 『刑法講義総論(上)』(1983年)  
『刑法講義総論(下)Ⅱ』(2002年)  
「日本における「古典学派」刑法理論と判例・実務—共謀共同正犯を中心に—」『刑事法学の課題と展望(香川達夫博士古稀祝賀)』(1996年)
- 夏目文雄 「共謀共同正犯の理論」の批判的検討(Ⅰ～Ⅲ) 愛知大学法経論集(法律篇)53号(1967年)1-39頁、54号(1967年)29-71頁、55号(1967年)37-70頁  
「共謀共同正犯の理論」の批判的検討(Ⅷ) 愛知大学法経論集(法律篇)55号(1967年)  
「共謀共同正犯論の回顧と展望」法経論集(愛知大学)98号(1982年)
- 西田典之 「共謀共同正犯について」『平野龍一先生古稀祝賀論文集 上巻』(1990年)  
「共謀共同正犯論—肯定説の立場から—」刑法雑誌31巻3号(1991年)  
『刑法総論』(2010年)  
『共犯理論の展開』(2010年)
- 西原春夫 「共同正犯における犯罪の実行」『現代の共犯理論(齊藤金作博士還暦祝賀論文集)』(1964年)  
『刑法総論』(1977年)  
「憂慮すべき最近の共謀共同正犯実務」刑事法ジャーナル3号(2006年)
- 西原春夫=吉井蒼生夫=藤田正=新倉修編著  
『旧刑法(1)(明治13年)』(日本立法資料全集29)(1994年)  
『旧刑法(3)―Ⅰ(明治13年)』(日本立法資料全集32)(1996年)
- 野中勝良 『刑法彙論』(1897年)
- 沼義雄 『刑法大要總論各論』(1937年)
- 橋本正博 「過失共同正犯の理論的基礎—「行為支配」と過失共働」一橋論叢98巻5号(1987年)  
『「行為支配論」と正犯理論』(2000年)  
「共謀共同正犯」概念再考『神山敏雄先生古稀祝賀論文集第1巻』(2006年)
- 林幹人 「正犯の内容—正犯と狭義の共犯の区別」研修601号(1998年)  
「共謀共同正犯と『謀議』」判例時報1886号(2005年)  
『刑法総論』(2008年)
- 平場安治 『刑法総論講義』(1961年)
- 平井彦三郎 『刑法論綱總論』(1930年)546頁
- 平良木登規男 「共謀共同正犯について」『刑事法学の総合的検討(下)』(1993年)  
「共謀共同正犯事例等におけるドイツ判例実務」『西原春夫先生古稀祝賀論文集』(1998年)
- 平沼騏一郎 『刑法総論』(1905年)

- 平野龍一 「刑法と判例と学説」『刑法の基礎』(1966年)  
「正犯と実行」『犯罪と刑罰(上)(佐伯千仞博士還暦祝賀)』(1968年)  
『刑法 総論Ⅱ』(1977年)  
「共謀共同正犯における共謀は罪となるべき事実である——共犯者の自白と補強証拠」『刑事判例評釈集第二十巻』(1992年)
- 藤木英雄 「共謀共同正犯の根拠と要件(一)」法学協会雑誌78巻6号(1962年)  
「共謀共同正犯の根拠と要件(二)完」法学協会雑誌79巻1号(1962年)  
「共謀共同正犯」『刑法判例百選(新版)(別冊ジュリスト27号)』(1970年)  
『刑法講義総論』(1975年)
- 藤波元雄 「共同正犯の観念と大審院判例」法曹記事32巻1号(1922年)
- 福田平 『全訂刑法総論』(2011年)
- 福永俊輔 「教唆犯規定の意義に関する一考察」森尾ほか編『人間回復の刑事法学』(2010年)
- 堀田正忠 『刑法積義第壹編』(1883年)  
『刑法積義第三巻』(1883年)
- 法務大臣官房司法法制調査部編  
『フランス刑法典』(1977年)
- 本田稔 「共謀共同正犯における「共謀」事実の特定の意義」法学セミナー584号(2003年)
- 前田雅英 『刑法総論講義』(2011年)
- 牧野英一 『日本刑法』(1917年)  
『日本刑法』(1922年)  
「刑法改正案と共犯の独立性(一)」法学協会雑誌50巻8号(1932年)  
「共謀共同正犯雑考」法曹時報2巻2号(1950年)
- 町野朔ほか編著  
『判例によるドイツ刑法総論』(1987年)
- 松原一雄 『新刑法論』(1904年)
- 松原芳博 「共謀共同正犯と行為主義」『鈴木茂嗣先生古稀祝賀論文集上巻』(2007年)  
「共謀共同正犯論の現在」法曹時報63巻7号(2011年)  
『刑法総論』(2013年)
- 松宮孝明 「(紹介) ギュンター・ヤコブス 故意なき道具を利用した間接正犯における客観的帰属」立命館法学258号(1998年)  
「『正犯』と『共犯』—その限界と根拠」刑法雑誌39巻2号(1999年)  
『刑法総論講義』(2009年)
- 松室致 『刑法総則之部・完』(1894年)
- 松本時夫 「共謀共同正犯と実務」法学教室2期4号(1974年)  
「共謀共同正犯と判例・実務」刑法雑誌31巻3号(1991年)

- 水落伸介 「共謀共同正犯の構造について」中央大学大学院研究年報 41 号法学研究科篇 (2012 年)
- 三井誠＝町野朔＝中森喜彦  
『刑法学のあゆみ』(1984 年)
- 箕作麟祥訳 『佛蘭西法律書』(1875 年)
- 宮城浩蔵 『刑法正義 (上巻)』(1894 年)
- 宮本英脩 『刑法大綱』(1935 年)
- 村井敏邦 「共謀共同正犯—否定説の立場から—」刑法雑誌 31 卷 3 号 (1991 年)
- 村瀬均 「共謀 (1) —支配型共謀」『刑事事実認定重要判決 50 選』(小林充＝植村立郎編) (2010 年)
- 泉二新熊 『改正日本刑法論全』(1908 年)  
『日本刑法論上巻』(1923 年)  
『日本刑法論上巻 (總論)』(1930 年)
- 森川恭剛 「因果的共犯論の課題—教唆の未遂の否定と正犯と共犯の区別」九大法学 68 号 (1994 年)
- 安平政吉 『日本刑法總論』(1944 年)
- 山内昭善 「共謀共同正犯と教唆犯」大塚＝佐藤編『新実例刑法 (總論)』(2001 年)
- 山岡萬之助 『刑法原理』(1912 年)
- 山口厚 「覚せい剤事犯と共犯論」刑法雑誌 27 卷 2 号 (1986 年)  
『問題探究刑法總論』(1998 年)  
『刑法總論』(2007 年)
- 山口邦夫 「刑法におけるヘーゲル学派」『一九世紀ドイツ刑法学研究』(1979 年)
- 山中敬一 『刑法總論第 2 版』(2008 年)  
「銃砲刀劍類所持等取締法違反 (けん銃等所持) の共謀共同正犯の成否」法学論集 (関西大学) 53 卷 3 号 (2003 年)
- 山中敬一監訳 『組織内犯罪と個人の刑事責任』(2002 年)
- 吉井蒼生夫＝藤田正＝新倉修編著  
『ボアソナード講義刑法草按注解上 (旧刑法別冊(1))』(日本立法資料全集 8) (1992 年)  
『ボアソナード講義刑法草按注解下 (旧刑法別冊(2))』(日本立法資料全集 9) (1992 年)
- 吉田常次郎 『日本刑法』(1927 年)
- 米田泰邦 「共謀共同正犯—否定論の立場から—」中編『論争刑法』(1976 年)
- 鷺尾健治 「共犯論」京都法学会雑誌 1 卷 9 号 (1906 年)  
「共犯論」京都法学会雑誌 1 卷 10 号 (1906 年)

フォスタン・エリー＝ショウボ・アドルフ著・磯部四郎＝宮城浩蔵訳

『佛國刑法大全下巻』(1886年)

ブーフ著・高木豊三訳

『佛國刑法畧論』(1877年)

マルトラン著・井上正一訳

『佛國刑法原論第壹帙上巻』(1888年)

ベルトール著・福原直道訳

『佛國刑法詳説第一巻』(1880年)

## 二. ドイツ語文献

*Altenhain, Karsten, Die Mitwirkung eines anderen Bandenmitglieds, ZStW 113(2001)*

*Ambos, Kai, Tatherrschaft durch Willensherrschaft kraft organisatorischer Machtapparate,*

GA 1998

*Arzt, Strafrecht Besonderer Teil, LH 3, 1978*

*Arzt/Weber/Heinrich/Hilgendorf, Strafrecht Besonderer Teil Lehrbuch, 2009*

*Bauer, Anton, Lehrbuch der Strafrechtswissenschaft, 1827*

*Bauer, Anton, Abhandlungen aus dem Strafrechte und dem Strafprocesse, 1. Bd., 1840*

*Baumann, Jürgen, Täterschaft und Teilnahme, JuS 1963*

*Baumann/Weber/Mitsch, Strafrecht Allgemeiner Teil, 9. Aufl. 2003*

*Beling, Ernst, Die Lehre vom Verbrechen, 1906*

*Berner, Albert Friedrich, Lehrbuch des Deutschen Strafrechts, 1857*

*Berner, Albert Friedrich, Grundsätze des Preußischen Strafrechts, 1861*

*Beseler, Georg, Kommentar über das Strafgesetzbuch für die Preußischen Staaten und das*

*Einführungsgesetz vom 14. April 1851., 1851*

*Binding, Karl, Strafrechtliche und strafprozessuale Abhandlungen, 1. Bd., 1915*

*Bloy, René, Grenzen der Täterschaft bei fremdhändiger Tatausführung, GA 1996*

*Bockelmann, Paul, Strafrecht Besonderer Teil/1, 1976*

*Buri, Maximilian von, Zur Lehre von der Theilnahme an dem Verbrechen und der*

*Begünstigung, 1860*

*Buri, Maximilian von, Abhandlungen aus dem Strafrecht, 1862*

*Buri, Maximilian von, Die Causalität und ihre strafrechtlichen Beziehungen, 1885*

*Buri, Maximilian von, Ueber Causalität und deren Verantwortung, 1873*

*Corves, Erich, Die ab 1. April 1970 geltenden Änderungen des Besonderen Teils des*

*Strafgesetzbuch, JZ 1970*

*Cramer, Peter, Gedanken zur Abgrenzung von Täterschaft und Teilnahme, in: Festschrift für*

*Paul Bockelmann, 1979*

- Cucumus*, Ueber den Unterschied zwischen Complot und Bande, Neues Archiv des Criminalrechts, 14. Bd., 1. Stk., 1833
- Czepluch, Anna –Katharina*, Täterschaft und Teilnahme im französischen Strafrecht, 1994
- Dalcke/Fuhrmann/Krug/Schäfer*, Strafrecht und Strafverfahren, 30. Aufl. 1938
- Dencker, Friedrich*, Kausalität und Gesamttat, 1996
- Dencker, Friedrich*, Beteiligung ohne Täter, in: Festschrift für Klaus Lüderssen, 2002,
- Dreher, Eduard*, Anmerkung zu: BGH NJW 1970, 1279, NJW 1970
- Dreher, Eduard*, Strafgesetzbuch, 37. Aufl. 1977, § 244
- Dreher/Tröndle*, Strafgesetzbuch, 44. Aufl. 1988, § 244
- Ellbogen, Klaus*, Zu den Voraussetzungen des täterschaftlichen Bandendiebstahls, Wistra 2002
- Engländer*, Die Täterschaft beim Bandendiebstahl, GA 2000
- Erb, Volker*, Mord in Mittäterschaft – BGH NJW 1991, 1068, JuS 1992
- Erb, Volker*, Die Qualifikationstatbestände der Bandenhehlerei (§§ 260 Nr.2, 260a StGB), NStZ 1998
- Erb, Volker*, Die Neuinterpretation des Bandenbegriffs und des Mitwirkungserfordernisses beim Bandendiebstahl, NStZ 2001
- Feuerbach*, Lehrbuch des gemeinen in Deutschland geltenden Peinlichen Rechts, 1. Aufl. 1801
- Feuerbach*, Lehrbuch des gemeinen in Deutschland gültigen peinlichen Rechts, 4. Aufl., 1808
- Feuerbach*(Hrsg. von *Mittermaier*), Lehrbuch des gemeinen in Deutschland gültigen peinlichen Rechts, 1840
- Fischer, Thomas*, Strafgesetzbuch, 60. Aufl. 2013
- Frank, Reinhard*, Das Strafgesetzbuch für das Deutsche Reich, 3. u. 4. Aufl. 1903
- Freund, Georg*, Strafrecht Allgemeiner Teil, 1998
- Frister, Helmut*, Strafrecht Allgemeiner Teil, 5. Aufl. 2011
- Frister, Helmut*, Zum Strafgrund von Mittäterschaft und Teilnahme, in: Festschrift für Friedrich Dencker, 2012
- Geib, Gustav*, Lehrbuch des Deutschen Strafrechts, 2. Bd., 1862
- Geyer*, Theilnahme Mehrerer an einem Verbrechen und Begünstigung, in: *Holtzendorff*(Hrsg.), Handbuch des deutschen Strafrechts, 2. Bd., 1871
- Gropp, Walter*, Strafrecht Allgemeiner Teil, 3. Aufl. 2005
- Goldammer*, Die Materialien zum Straf-Gesetzbuche für die Preußischen Staaten, Teil I., 1851
- Haas, Volker*, Die Theorie der Tatherrschaft und ihre Grundlagen, 2008
- Häberlin, Karl Friedrich*, Grundsätze des Criminalrechts nach den neuen deutschen

- Strafgesetzbüchern, Bd. 1, 1845
- Hälschner, Hugo*, System des Preußischen Strafrechtes, 1. Theil, 1858
- Hälschner, Hugo*, Die Mitthäterschaft im Sinne des deutschen Strafgesetzbuches, GS 1873
- Hälschner, Hugo*, Das gemeine deutsche Strafrecht, 2. Teil, 1884
- Hauf, Claus – Jürgen*, Neuere Entscheidungen zur Mittäterschaft unter besonderer Berücksichtigung der Problematik der Aufgabe der Mitwirkung eines Beteiligten während der Tatausführung bzw. Vor Eintritt in das Versuchsstadium, NSTZ 1994
- Heger, Martin*, Beteiligung, JA 2002
- Heimberger, Joseph*, Die Teilnahme am Verbrechen in Gesetzgebung und Litteratur von Schwarzenberg bis Feuerbach, 1896
- Heimann-Trosien*, in: Strafgesetzbuch Leipziger Kommentar, 2. Bd., 9. Aufl. 1974, § 244
- Heinrich, Bernd*, Strafrecht-Allgemeiner Teil, 3. Aufl., 2012
- Henke, Eduard*, Handbuch des Criminalrechts und der Criminalpolitik, 1823
- Hergt, Raimund*, Die Lehre von der Teilnahme am Verbrechen, 1909
- Herzberg, Rolf Dieterich*, Täterschaft und Teilnahme, 1977
- Herzberg, Rolf Dieterich*, Mittäter durch Mitvorbereitung: eine actio communis in causa?, JZ 1991
- Herzberg, Rolf Dieterich*, Mittelbare Täterschaft und Anstiftung in formalin Organisationen, in: *Knut Amelung (Hrsg.)*, Individuelle Verantwortung und Beteiligungsverhältnisse bei Straftaten in bürokratischen Organisationen des Staates, der Wirtschaft und der Gesellschaft, 2000
- Hippel, Robert von*, Lehrbuch des Strafrechts, 1932
- His, Rudolf*, Das Strafrecht des deutschen Mittelalters, 1920
- Hohmann, Olaf*, Anmerkung zu: BGH NSTZ 2000, 255, NSTZ 2000
- Hoyer, Andreas*, Systematischer Kommentar zum Strafgesetzbuch, Bd. 1, 7. Aufl. 2005, §25
- Jagusch*, in: Strafgesetzbuch Leipziger Kommentar, 2. Bd., 8. Aufl., 1958
- Jakobs, Günther*, Strafrecht Allgemeiner Teil, 2. Aufl. 1991
- Jakobs, Günther*, Anmerkung zu: BGH NSTZ 1994, 537, NSTZ 1995
- Jarcke, Carl Ernst*, Handbuch des gemeinen deutschen Strafrechts, 1827
- Jescheck, Hans-Heinrich • Weigend, Thomas*, Lehrbuch des Strafrechts, Allgemeiner Teil, 5. Aufl. 1996
- Joecks*, Strafgesetzbuch Studienkommentar, 10. Aufl., 2012
- Joerden, Jan C.*, Strukturen des strafrechtlichen Verantwortlichkeitsbegriffs: Relationen und ihre Verkettungen, 1988
- Joerden, Jan C.*, Der Bandendiebstahl und seine Mitwirkenden, JuS 2002

- Johannsen, Sven Leif Erik*, Die Entwicklung der Teilnahmelehre in der Rechtsprechung, 2009
- John*, Kritiken strafrechtlicher Entscheidungen des Preußischen Obertribunals, 1866
- Kindhäuser, Urs*, Strafrecht Besonderer Teil II, 1998
- Kindhäuser, Urs*, Handlungs- und normtheoretische Grundfragen der Mittäterschaft, in:  
Festschrift für Hollerbach, 2001
- Kindhäuser, Urs*, Strafrecht Allgemeiner Teil, 6. Aufl. 2013
- Kindhäuser, Urs*, Strafrecht Besonderer Teil II, 7. Aufl. 2013
- Kitka, Joseph*, Ueber das Zusammentreffen mehrerer Schuldigen bey einem Verbrechen,  
1840
- Kleinschrod*, Kann bei einem Complotte der Verschworne, welcher bei der Vollziehung der  
That abwesend war, mit der ordentlichen Strafe belegt werden?, Neues  
Archiv des Criminalrechts, 4. Bd. 3. Stk., 1820
- Köhler, Michael*, Strafrecht Allgemeiner Teil, 1997
- Kohlrausch-Lange*, Strafgesetzbuch, 43. Aufl. 1961
- Köstlin, Christian Reinhold*, System des Deutschen Strafrechts, Abtl. 1, 1855
- Krey/Esser*, Deutsches Strafrecht Allgemeiner Teil, 5. Aufl. 2012
- Krey/Hellmann/Heinrich*, Strafrecht Besonderer Teil, Bd.2, 16. Aufl. 2012
- Kühl, Kristian*, Strafrecht Allgemeiner Teil, 7. Aufl. 2012
- Küper, Wilfried*, Strafrecht Besonderer Teil, 8. Aufl. 2012
- Küpper, Georg*, Anspruch und wirkliche Bedeutung des Theorienstreits über die  
Abgrenzung von Täterschaft und Teilnahme, GA 1986
- Küpper, Georg*, Anforderungen an Mittäterschaft, NSTZ 1995
- Lackner/Maassen*, Strafgesetzbuch, 4. Aufl. 1967
- Lackner, Karl*, Strafgesetzbuch, 13. Aufl. 1980
- Liepmann, Moritz*, Einleitung in das Strafrecht, 1900
- Liszt, Franz von*, Lehrbuch des Deutschen Strafrechts, 3. Aufl., 1888
- Liszt/Schmidt*, Lehrbuch des Deutschen Strafrechts, 25. Aufl. 1927
- Luden, Heinrich*, Handbuch des teutschen gemeinen und particularen Strafrechtes, 1. Bd.,  
1847
- Malek, Klaus*, Betäubungsmittelstrafrecht, 3. Aufl. 2008
- Martin, Sigmund P.*, Entscheidungsbesprechung zu: BGH NJW 2001, 2266, JuS 2001
- Martin, Sigmund P.*, Verabredung zu einem Verbrechen – Abgrenzung von Mittäterschaft  
und Beihilfe, JuS 2002
- Maurach*, Strafrecht Besonderer Teil, 5. Aufl. 1969
- Maurach/Schroeder*, Strafrecht Besonderer Teil, Teilband 1, 6. Aufl. 1977
- Maurach/Schroeder/Maiwald*, Strafrecht Besonderer Teil Bd.1, 10. Aufl., 2009

- Mayer, M. E., Der Allgemeine Teil des deutschen Strafrechts, 2. Aufl. 1923
- Meyer/Allfeld, Lehrbuch des Deutschen Strafrechts, 8. Aufl. 1922
- Mezger, Edmund, Strafrecht, 2. Aufl. 1933
- Mittermeier, C. J. A., Ueber Begriff, Arten und Strafbarkeit des Urhebers, Neues Archiv des Criminalrechts, 3. Bd., 1. Stk., 1819
- Murmann, Uwe, Tatherrschaft durch Weisungsmacht, GA 1996
- Nack, Armin, Mittelbare Täterschaft durch Ausnutzung regelhafter Abläufe, GA 2006
- Olshausen, , Kommentar zum Strafgesetzbuch für das Deutsche Reich, 6. Aufl. 1901
- Oppenhoff/Oppenhoff, Das Strafgesetzbuch für das Deutsche Reich, 14. Agb. 1901
- Otto, Horro, Die neuere Rechtsprechung zu den Vermögensdelikten – Teil 1, JZ 1993
- Otto, Harro, Täterschaft kraft organisatorischen Machtapparates, Jura 2001
- Otto, Harro, Grundkurs Strafrecht Die einzelnen Delikte, 7. Aufl., 2007
- Petters-Preisendanz, Strafgesetzbuch, 26. Aufl. 1970
- Pfeiffer/Maul/Schulte, Strafgesetzbuch Kommentar, 1969, § 243
- Puppe, Ingeborg, Wie wird man Mittäter durch konkuledntes Verhalten?, NSTZ 1991
- Puppe, Ingeborg, Strafrecht Allgemeiner Teil im Spiegel der Rechtsprechung, 2. Aufl., 2011
- Regge, Jürgen(Hrsg.) , Gesetzrevision(1825 – 1848) I . Abteilung Straf – und Strafprozeßrecht, Bd. 1, 1981
- Regge, Jürgen(Hrsg.) , Gesetzrevision(1825 – 1848) I . Abteilung Straf – und Strafprozeßrecht, Bd. 2, 1982
- Regge, Jürgen (Hrsg.) , Gesetzrevision(1825 – 1848) I . Abteilung Straf – und Strafprozeßrecht, Bd. 3, 1984
- Regge, Jürgen(Hrsg.) , Gesetzrevision(1825 – 1848) I . Abteilung Straf – und Strafprozeßrecht, Bd.5, 1994
- Regge, Jürgen(Hrsg.) , Gesetzrevision(1825 – 1848) I . Abteilung Straf – und Strafprozeßrecht, Bd. 6, Teil 1, 1996
- Regge, Jürgen(Hrsg.) , Gesetzrevision(1825 – 1848) I . Abteilung Straf – und Strafprozeßrecht, Bd. 6, Teil 2, 1996
- Rengier, Rudolf, Strafrecht Besonderer Teil I , 6. Aufl. 2003
- Rengier, Rudolf, Strafrecht Allgemeiner Teil, 4. Aufl. 2012
- Renzikowski, Joachim, Restriktiver Täterbegriff und fahrlässige Beteiligung, 1997
- Rotsch, Thomas, „Einheitstäterschaft “ statt Tatherrschaft, 2009
- Rotsch, Thomas, Tatherrschaft draft Organisationsherrschaft ? , ZStW 112(2000)
- Roxin, Claus, Die Abgrenzung von Täterschaft und Teilnahme in der höchstrichterlichen Rechtsprechung, in: Roxin/Widmaier(Hrsg.), 50 Jahre Bundesgerichtshof, 2000, Bd. IV.

- Roxin, Claus, Strafrecht Allgemeiner Teil, Bd. 2, 2003
- Roxin, Claus, Organisationsherrschaft und Tatentschlossenheit, in: Festschrift für Friedrich-Christian Schroeder, 2006
- Roxin, Claus, Täterschaft und Tatherrschaft, 8. Aufl., 2006
- Roxin, Claus, Anmerkung zu:BGH JR 1991, 205
- Rudolphi, Hans Joachim, Zur Tatbestandsbezogenheit des Tatherrschaftsbegriffs bei der Mittäterschaft, in: Festschrift für Paul Bockelmann, 1979
- Rüdorff/Stenglein, Strafgesetzbuch für das deutsche Reich, 4. Aufl. 1892
- Seelmann, Kurt, Grundfälle zu den Eigentumsdelikten, JuS 1985
- Schirach, Wilhelm von, Entwicklung der Lehre vom Komplott, Neues Archiv des Criminalrechts, 1. Band 4. Stück, 1817
- Schlösser, Jan, Soziale Tatherrschaft, 2004
- Schmidhäuser, Eberhard, Strafrecht Allgemeiner Teil Studienbuch, 2. Aufl. 1984
- Schmidt, Eberhard, Einführung in die Geschichte der deutschen Strafrechtspflege, 2. Aufl. 1951
- Schönke/Schröder, Strafgesetzbuch Kommentar, 13. Aufl. 1967
- Schönke/Schröder/Cramer/Heine, Strafgesetzbuch Kommentar, 28. Aufl., 2010, Vor. §§25 ff., §25.
- Schönke/Schröder/Lenckner/Sternberg –Lieben, Strafgesetzbuch Kommentar, 28. Aufl. 2010, § 129
- Schönke/Schröder/Cramer/Eser/Bosch, Strafgesetzbuch Kommentar, 28. Aufl. 2010, § 244
- Schroeder, Friedrich –Christian, Der Täter hinter dem Täter, 1965
- Schroeder, Friedrich –Christian, Der Sprung des Täters hinter dem Täter aus der Theorie in die Praxis, JR 1995
- Schroeder, Friedrich –Christian, in: Hilgendorf(Hrsg.), Die deutschsprachige Strafrechtswissenschaft in Selbstdarstellungen, 2010
- Schroeder, Friedrich –Christian, Anmerkung zu: BGH NStZ 2005, 35
- Schubert/Regge/Schmid/Schröder(Herg.), Kodifikationsgeschichte Strafrecht Quellen zum Strafgesetzbuch von 1870, Bd. 1, 1992
- Schubert/Regge/Schmid/Schröder(Herg.), Kodifikationsgeschichte Strafrecht Quellen zum Strafgesetzbuch von 1870, Bd. 2, 1992
- Schünemann, Bernd, Raub und Erpressung(2. Teil), JA 1980
- Schünemann, Bernd, Die Rechtsfigur des „Täters hinter dem Täter“ und das Prinzip der Tatherrschaftssufen, in: Festschrift für Friedrich – Christian Schroeder, 2006
- Schünemann, Bernd, in: Leipziger Kommentar, Bd. 1., 12. Aufl., 2007, Vor§25ff., § 25.
- Schünemann, Bernd, Schrumpfende Basis, wuchernder Überbau? Zum Schicksal der

- Tatherrschaftsdoktrin nach 50 Jahren, in: Festschrift für Claus Roxin zum 80. Geburtstag, 2011
- Shimada, Soichiro*, Ein neuer Aspekt der Täterlehre Erkenntniss aus der japanisch – deutschen Rechtsvergleichung, GA 2009
- Stenglein*, Sammlung der deutschen Strafgesetzbücher, 1858, Bd.1 – 3.
- Stratenwerth/Kuhlen*, Strafrecht Allgemeiner Teil, 6. Aufl. 2011
- Strebelow, Hans*, Komplott und Bande im geltenden Recht, 1927
- Stübel, Christoph Carl*, Ueber die Theilnahme mehrerer Personen an einem Verbrechen, 1828
- Sya, Anja*, Der Bandenbegriff im Wandel, NJW 2001
- Tittmann, Carl August*, Ueber die Darstellung der Lehre von den Urhebern und Gehülfen in einem Strafgesetzbuche, Neues Archiv des Criminalrechts, 2. Bd., 3. Stk., 1818
- Tittmann, Carl August*, Handbuch der Strafrechtswissenschaft und der deutschen Strafgesetzkunde, 1822
- Tröndle, Herbert*, Die Rechtsprechung des Bundesgerichtshofs in Strafsachen Materielles Recht, GA 1973
- Vogel, Joachim*, in: Strafgesetzbuch Leipziger Kommentar, 8. Bd., Aufl. 12., 2010, § 244
- Volk*, Anmerkung zu: BGH JR 1979, 425, JR 1979
- Vormbaum, Thomas*, Einführung in die moderne Strafrechtsgeschichte, 2. Aufl. 2011
- Wachenfeld*, Lehrbuch des Deutschen Strafrechts, 1914
- Wächter, Carl Georg*, Lehrbuch des Römisch-teutschen Strafrechts, Bd.1, 1825
- Wessels*, Strafrecht Besonderer Teil – 2, 5. Aufl. 1982,
- Wessels/Beulke*, Strafrecht Allgemeiner Teil, 38. Aufl. 2008
- Welzel, Hans*, Das Deutsche Strafrecht, 8. Aufl., 1963
- Wächter, Carl Georg*, Lehrbuch des Römisch-teutschen Strafrechts, Bd.1, 1825
- Zaczyk*, Die »Tatherrschaft kraft organisatorischer Machtapparate« und der BGH, GA 2006
- Zieschang, Frank*, Mittäterschaft bei bloßer Mitwirkung im Vorbereitungsstadium?, ZStW 107(1995)
- Zimmerl, Leopold*, Grundsätzliches zur Teilnahmelehre, ZStW 1929